

令和4年度テーマ展

新収蔵品展

令和2年度～令和3年度

あわら市郷土歴史資料館

令和2年度から令和3年度までに寄贈・寄託された資料の中から、真言宗の古刹・北潟安楽寺の本尊を守護する十二神将像をはじめ、吉崎浦で廻船業を営んでいた家に伝わった屏風や、地域に伝わる史料、昭和時代に使われた生活道具など、あわらの歴史を今に伝える資料を公開します。展示は途中一部の資料を入れ替え、前期・中期・後期に分けての3期構成となっております。

☆展示資料紹介☆

ろつきよくいっせきびょうぶ 【六曲一隻屏風】(寄贈資料)(展示期間：前・中期)

この屏風は吉崎の鹿野家に伝わったものです。落款はなく、制作者不明ながら丁寧な彩色と構図が目をひきます。蚕が生まれてから織物ができるまでをテーマにした多色刷りの浮世絵を「蚕織錦絵」と呼び、江戸時代後期から明治時代にかけて盛んに制作されました。この屏風もそれに類するものと考えられます。

養蚕は、蚕の餌となる桑の畑を春に手入れすることから始め、地方によりはおおよそ5月から10月頃まで飼育と繭の収穫が行われます。この屏風には、奥に稲のない田や桜、水辺には初夏の杜若、左には紅葉などが見えることから、そのような春から秋の風景を一つに描いたものと思われます。



しょうかひつようき げのまき
【匠家必用記 下之巻】（寄贈資料）（展示期間：前・中期）



本資料は、吉崎で大工をしていた家から寄贈を受けたものです。
著者は美作国津山の立石定準^{たていしだのり}で、江戸で出版業を営んでいた、
須原屋茂兵衛^{すはらやもへえ}（4代目）が宝暦6年（1756）に上中下3巻本で出版しました。大工に関連する知識本で、建物の様式や、建築に関する儀式のやり方などが記されており、下巻には「地鎮の神事」「屋根葺きの事」等17項が収録されています。

ろつきよくいっそうびようぶ
【六曲一双屏風】（寄贈資料）（展示期間：後期）

この屏風は、吉崎の鹿野家に伝わったもので、片方は盛唐の詩人李白^{りはく}（701～762）の「上皇西巡南京歌二首」^{じょうこうせいじゆんなんけいかにしゆ}の其一、もう片方が中唐の詩人李益^{りえき}（748～827?）の「從軍北征」^{じゆうぐんほくせい}を書いています。その書風は江戸時代中期に三井親和^{みつしんな}（1700～1782）が得意とした、篆書と行草書^{ぎようそうしよ}を織り交ぜたものです。書者には「東都文和」^{とうとぶんな}とあります。江戸を意味する「東都～」は親和がその作品の落款^{らっかん}にしばしば使っているだけでなく、白文印の中に見える「儒卿」^{じゆけい}は親和の字、^{あざな}「信州」は親和の出身地、そしてなによりその書風が親和そのものです。ただし親和が「文和」という号を使ったことは確認できておらず、謎が深まる作品です。



びじんなつすがたず
【美人夏姿図】（寄託資料：個人蔵）（展示期間：後期）

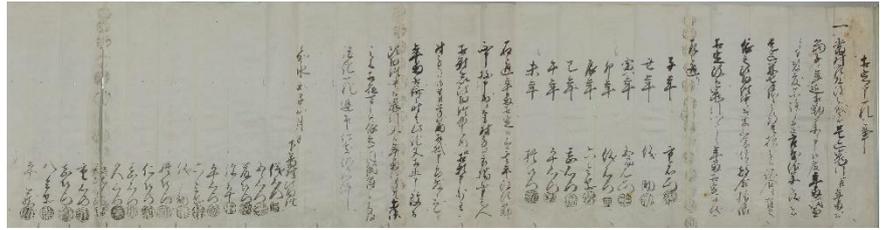


島田髷^{まげ}を結った若い女性がうちわを片手に涼む姿を描いています。着崩した様子や薄化粧の顔に見える赤みから、夏の暑さが伝わってくるようです。このような夏姿の美人図は喜多川歌麿^{きたがわうたまる}（1753～1806）らも手掛けた人気の画題でした。本作品を描いた三畠上龍^{みはたじょうりゆう}（生没年不詳）は、江戸時代後期に大坂を拠点に活躍した、美人画を専門とする絵師として著名な人物でした。その画風は多くの追随者を出し、明治時代から昭和時代の美人画の大家である上村松園^{うえむらしようえん}（1875～1949）を通じて現在にまで至るとも言われています。なお印に見える「乗良」「真真」は三畠上龍の別号です。

あいさだめ もうすいっさつのこと

【相定メ申一札之事（下番区有文書）】（寄贈資料）（展示期間：前・中期）

嘉永5年(1852)の史料で、幕末の下番村（現本荘地区下番）では、頭百姓16人の中から「くじ」を引いて庄屋役（村方の役人）を決めていた



ことや、任期は一年ごとの交代制ということがわかります。庄屋に支給される米は、それまで7俵でしたが、支給される米だけでは様々な業務を遂行する庄屋役の費用に間に合わず、庄屋役を引き受けたがらない頭百姓がいました。頭百姓中で何回か相談をして給米の増額に踏み切り、頭百姓内で3俵を追加し10俵としました。このことを受け、改めてくじを引いて決まった庄屋役の名と順番が書かれています。また、安政6年(1859)、明治2年(1869)にも「くじ」で庄屋役を決めた史料が残っています。

さげじゅう

【堤重】（寄贈資料）（展示期間：通期）

重箱は、室町時代には文献に登場する食器の一つで、元々宴席に着物を盛って出す器として使われていましたが、後に節句の時に重詰で料理を出すのに使われました。堤重は、その重箱とそれを載せて運ぶ台と提げ手つきの運搬具を一組みにしたもので、江戸時代中期ごろから登場し、花見や芝居見物の時に使われていました。展示品は、漆塗りで外側には家紋を多数施し、



すずりぶた

提げ環の付いた枠中に4段の重箱・2本の金属製徳利と漆塗の盃・2枚の硯蓋などが組み合わされたもので、このように多くの食器がセットになっているのはとても豪華なものです。ちなみに家紋は、寄贈者の家の家紋で、オーダーメイドで作らせたものと思われる。

あわらやき てつゆうかびん

【芦原焼 鉄釉花瓶】（寄贈資料）（展示期間：中・後期）

芦原焼は石川県大聖寺出身の久世清が大正3年(1914)に温泉街で創業した焼き物です。久世は芦原温泉に良い土産がなかったことを聞きつけ土産を作ろうと奮起しましたが、当初は湿度の高い芦原温泉の風土に適さず上手くいきませんでした。しかし、窯の改造を機に事業は軌道に乗り出します。その後、芦原焼は四代続き、代々の当主は初代・清の号「天聲」を継ぎました。本資料は三代目天聲を継いだ武助の作品です。本資料の底の部分には「芦原天声」の印があります。



しんちゃ

【新茶バサミ】（寄贈資料）（展示期間：通期）

新茶を刈り取る道具です。本資料は寄贈者（昭和 22 年(1947)生まれ）が坂井市三国町池上に住んでいた時に、家族が昭和 48 年(1973)頃まで使用していました。新茶を刈るときは、ハサミを軽く載せて柔らかいところを刈ります。新茶は5月上旬から20日ごろまでに刈り取り、刈り取った新茶はソラグツ（藁で編んだ入れ物）に入れ荷車に載せて村の製茶工場へ出荷し重量で決済されました。江戸時代末期ごろから坂井北部丘陵は茶の生産が盛んでしたが、昭和 44 年(1969)から行われた丘陵地の開拓を受け、茶畑はほとんどなくなりました。



じゅうにしんしょうぞう

【十二神将像】（寄託資料：安楽寺蔵）（展示期間：各期2体ずつ展示）

北潟・安楽寺は泰澄が養老 3 年(719)に開基した寺院と伝わり、真言宗の古刹として隆盛期を偲ばせる金剛力士像（県指定文化財）等が数多く残ります。

十二神将像は、安楽寺の本尊・薬師如来坐像（市指定文化財）の周りに安置されていたもので、中世に作られたものと考えられています。十二神将は、薬師如来と薬師如来を信じる人々を守護する十二の大將のことです。十二という数は、薬師如来が菩薩として修行をしていた時に人々を救うため起こした「十二」の願を守っているところからきています。その後、十二支と結びつき方角や時間も守護するようになりました。



写真は亥神（左）、午神（右）（中期展示）

この十二神将像は足元の差し込み部分や台座の側面などに「うし」「う」「み」「むま（午）」「未」「い」といった十二支を表す文字が書かれています。

「新規収蔵品展 令和 2 年度～令和 3 年度」

会 期：令和 5 年 1 月 14 日（土）～令和 5 年 5 月 7 日（日）
開館時間：午前 9 時 30 分～午後 6 時（入館は午後 5 時 30 分まで）
休 館 日：毎週月曜日・第 4 木曜日（その日が祝日の場合はその翌日）
お問合せ：電話：0776-73-5158（郷土歴史資料館直通）